

人を育てる会社の社長が 今考えていること

vol. 1

役立たずの復興ボランティア

アソブロックで学生社員としてぼくのアシスタントをしている榊原という男子大学生がいる。学生社員とはインターンをより一歩進めた働き方で、彼の場合は大学が週2回なので、残りの3回を勤務日に充て、大学生と社会人の「兼業」をしているということになる。報酬も当然それなりに固定給で払っていて、大学卒業時にすぐに独立して個人事業主になれるようにスキルをセットアップする目標を立てている。一般的な「就職活動（シューカツ）」をせずとも、いち早く自分のやりたいことでゴハンが食べられるようになるために腕を上げるための仕組みが、アソブロックの学生社員である。

さて、その榊原が、先日北海道にボランティアに行った。くだんの地震の後で、ちょうど北海道に祖父母がいることもあり、様子を見に行きつつ復興の力になればということだった。彼が向かったのはNHKをはじめとしたニュースでもよく取り上げられた厚真町。ボランティアセンターが設置され、全国からの支援者に来てもらっている状況下だった。しかし、厚真町に赴いた彼は、結果的に自分の無力感に苛まれて帰京することになった。

その理由は、下記の通りである。

☆☆☆

北海道地震の震源地に近い厚真（あつま）、安平（あびら）、むかわの3町には、22～24日の3連休に延べ2,000人超の災害ボランティアが集まった。被災地では息の長い支援が求められているが、作業の割り振りなどがうまくいかずに参加の申し出を断った事例もあるなど、課題も浮上している。

最大震度7を観測した厚真町では24日、道内外から218人のボランティアが参加。町営パ

ークゴルフ場に設けられた災害ごみの収集場では、約 30 人が、被災住宅から搬出された家財道具を黙々と仕分けていた。参加 5 日目の室蘭市の福祉施設職員の男性（46）は「被災者のため、これからも参加したい」と話した。

被災者からの依頼を精査し、ボランティアを適所に割り当てる災害ボランティアセンターは各町の社会福祉協議会が設置、運営しているが、調整作業は簡単ではない。厚真町で参加した室蘭市の会社員の男性（38）は「仕事が割り振られるまで 1 時間以上待った」と話す。

雨が予想された 3 連休初日の 22 日、厚真町は募集人員を通常の半分以下の 50 人程度に減らしたが、実際には 100 人以上が集まった。135 人には仕事を依頼したが、数十人は断った。札幌市南区のパートの男性（67）は「力になりたいと思ったのに残念」と肩を落として帰った。

同町のセンターによると、作業を依頼してきた被災者と連絡が取れなくなることもあり、調整は難しい。担当者は「ボランティアは徐々に減っていくので、参加した人にもう一度来てもらえる努力や広報を考えたい」と話した。

（読売新聞_18/9/24_記事より）

☆☆☆

この「1 時間以上待った」うちの一人が榊原だった。中には待っている間、よもやま話に花を咲かせて楽しく過ごしていた人もいたそうだが、榊原はそんな気持ちにはなれなかった。手伝いに来たのであって、おじさんやおばさんとよもやま話をしに来たわけではないからだ。結果的に、被災地を横目に、ひとり何もせず待ち続けることになった。

ところがそんな中、到着してすぐに「待ってました」とばかりに迎えられ、現場に急行していく人たちがいたという。それは、ソーシャルカウンセラーや介護士といった、専門性を持った人たちだった。その光景を目にするにつけ、さらに無力感が募ったのだという。

結果的に、いくばくかの仕事は割り振られ、それなりに復興のお手伝いをして帰路についたそうなのだが「自分は街に戻るバスに乗る資格もないような気がして」、歩いて数時間かけて街に戻ると決めたという。バス自体の本数が少なく、バス待ちの行列が永遠と続いていたからだ。並ぶのが苦だったのではなく、役に立てなかった自分にはバスのスペースを与えてもらう資格はないと思ったのだという。

とぼとぼと街に向かって歩く中、偶然通りかかった車に拾われ街に戻った榊原。車中では、厚真町在住で自らも被災したというドライバーから、「遠くからよく来てくれたわねえー」と逆に励まされたのだそうだ。「一体自分は本当に何をしに来たのだ」と落ち込みはさらに深くなったのだという。

☆☆☆

この一連の報告を聞きながら、確かに被災者のお役には立てなかったのかもしれない。ただ、榊原のキャリア形成においては、実にいい学びをさせてもらったな、と思った。榊原は帰京後、ヒトコトも「せっかく行ったのに満足な仕事も与えてもらえずに…」的な愚痴めいた感想を言うことはなかった。ただひとえに、「ああいう場で必要とされる人材にならないといけない」「自分は何かができるつもりでいても、実は何もできないのだ」ということを繰り返し悔しく思い、そしてそれを挽回すべく、今何をすべきかを考えている。

こういう形で、ボランティア活動から学ばせてもらう大学生もいるのだなと思った。確かに「せっかく足を運んだのに」と対応の不十分さを残念に嘆く人もいるだろう。一方で、そういったことも含めて、復興ボランティアそのものが、対人援助的な側面も持っているのだと思った。この度のボランティア活動で自分に起こった出来事を、そんな風に捉えられる大学生の、今後に期待だなと思う。

文/だん・あそぶ

「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な9つの会社の経営に携わる一方で、「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開している。

団遊の組織論； <https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/>

団遊の採用論； <https://job.cinra.net/special/asoblock/>

仕事を辞めなくなったときに； <https://goo.gl/bFQdpC>